夕焼け通信
2020.2.24 1250号

編集 宮森健次

〒699-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

手作りのくらし２　43

木幡智恵美

金山寺味噌（3）

積雪を見ることなく、新たな年が明けた。車のタイヤを交換せずに正月を迎えたのは初めてのことだ。

あと一か月足らずで満百歳となる義母は、家族で迎える恒例の年賀の朝食に、「みんなでやって」とベッドに寝たまま言われた。年末にベッドから落ちて、圧迫骨折していたので、致し方ないことだ。

親子三人でお節を囲む。男二人はパチンコ初打ちの話で盛り上がる中、出産間近の娘のこと、二人の孫の世話、義母の介護と、私の頭の中では年頭から取り越し苦労が始まっている。

男どもが出かけ、義母を起こして着替えさせ、食事を持って行ってから、近くの氏神様に初詣に出かけた。願いの最初は長女の無事な出産だ。長男、二男の良縁についてはもうどうでもいいか。あとは、孫たちも含めた家族の健康だ。

その夜は娘たち一家が年始に訪れ、義母も食卓まで連れてきて、八人でお節を囲んだ。五歳過ぎの寛大も、三歳半の実歩も、煮物を好んで食べる。息子が社会人になって煮物を食べ出したため、このところ一番に無くなるのは煮物の入ったお重だ。

「ちょっと、これ食べてみて」と、冷蔵庫から手作り金山寺味噌を出して、破裂しそうな腹の娘にパックを出す。「おいしい」と娘。あ、しまった。もうすぐ家に転がり込んで来るのだ。気に入られたら、あっという間に無くなってしまう。

それから二週間後、娘は無事男の子を産んだ。五日目には我が家へ。若い頃は、あまりご飯を食べなかったのに、「今は米だね」と、気が滅入るほどご飯を食べる。金山寺味噌もどんどん減っていく。私は孫たちを寝せないといけないので、寝酒などできはしない。楽しみにしていた金山寺味噌は、酒の肴になる前に無くなり、次のを仕込まねばならなくなった。

がらがら橋日記

宮森健次

一人旅

高校を卒業した春休みにバイクで一人旅することを思いついた。ようやく学校が終わったという解放感をこんな形で収めないと体のむずむずが止まらないのだった。

近所のバイク屋で最安の中古を買った。七千円だった。新聞配達のアルバイト料が月九千円、手の届くバイクは、このツーサイクルエンジンのカブだけだった。

行く先に選んだのは、奈良。東大寺のお水取りに間に合わせようと出発したのだが、雪がちらつくほどの寒さに体の芯まで冷えきって、着くには着いたが一時間旅館の風呂に浸かっていても体の震えが止まらなかった。お水取りを見る願いは叶わなかったが、それから一週間、日本史の教科書に載った口絵写真の実物たちにその場を動けなくなるほど鷲づかみにされた。

免許取りたて、バイク買いたて、思いついて即、ずっとあとで気がついたが、自動車専用道路をカブで構わず走っていた。その時は、ドライバーたちがなぜだれもかれものぞきこむようにぼくの顔を見ていくのかさっぱりわけが分からなかった。

大学生になった夏、同じカブを乗り続けていたぼくは、北海道に行くことを思いついた。奈良のその先は、北海道しかないとでもいうように。

友人の下宿でちょっとした出発式をやった。手作りのお守りだの餞別だの受け取って、出発したのが深夜二時だか三時だか。初日にできるだけ距離を稼ごうという計画だ。

敦賀の神社、金沢の友人宅、柏崎の寺、秋田のバス停、北海道でのひと月、何を食べようとどこで寝ようと翌朝にはきっちり元気になっている。なんて幸福な旅をしたのだろう。

あれから四十年経った今、再び寝ても覚めても旅のことを考えている。一日も休まなかった新聞配達は高校を卒業するのと同時にやめたが、大学を卒業してからほとんど休まずに四十年近く働いた。解放されたはずの学校でだ。ようやくそれもあと一年で終わろうとしている。

北海道への出発前夜もらった手作りのお守りは、旅の終わりには、汗やら埃やら排気ガスやらで黒く汚れていた。それでも無事に帰ってこれたのだから御利益は確かだった。一番の御利益は、その作者といっしょになれたことかもしれないが。

さてこれからってとき、いくらでも嫌がらせをしてくるのが人生ってものらしい。よくもまあ、次々と。だったらむずむずしてやろう。十八の体力と無知はもう手にはできないが、その代わりをかき集めて。

30代フリーター　やあ、ジイさん。米大統領選の民主党の候補者選びで穏健派のピート・ブティジェッジが勢いづいている。「彼なら民主党をまとめ、米国を再び一つにできる」という支持者の声が伝えられている（2月15日朝日新聞朝刊）。

年金生活者　もし彼が候補者に指名されれば、米国社会の分断を利用して支持を集めてきたトランプに対して、社会の再統合を期待される大統領候補になるだろう。

社会の分断は消費の過剰化にともなう国家から個人への権力の分散がもたらした。国家にとって社会の分断は分散した権力の回収をはかる助けになる。ローマ帝国のような「分割統治」がやりやすくなるからだ。選挙戦で味方の結束をはかるために分断をあおる言動を繰り返してきたトランプは、そうした国家による権力の回収に手を貸してきた。

これに対して、社会の再統合は「分割統治」を難しくし、国家への権力の回収を阻む作用をする。ただ、統合は画一性や統制につながりやすく、そうなると逆に国家への権力の回収をあと押しする。米民主党の掲げる多様性の尊重はそれに歯止めをかける概念と言っていい。

ブティジェッジが民主党の候補者になれるかどうか、なってもトランプに勝てるかどうかは今だれも予測できないとしても、現在のアメリカ社会に分断から統合へ向かう潮流が生まれていることは見て取ることができる。

30代　アメリカ社会の分断は簡単には埋まりそうにない。トランプの一般教書演説の直後に民主党の下院議長ペロシはその草稿を破り捨てたと報じられた（2月5日朝日新聞デジタル）。

年金　右か左か、保守かリベラルかといったイデオロギーの対立は古くからあった。それはおもに政治家どうしの争いとして存在した。一般の国民どうしがじかに争うことは少なく、代わりに政治家が国民の間にある考えの違いを代理して争っていた。

ところが、国家から個人に権力が分散しだすと、個人はそれを使って自前で争えるようになった。その結果、イデオロギーのせめぎ合いは政治の領域から社会の領域へと拡大した。

それ以前の社会なら、個人どうしはイデオロギーが違っていても、争わないで済ますこともできた。争いは政治家にまかせ、自分たちは仲良く暮らすこともできた。だが、自らが争いの当事者になると、イデオロギーと日常生活は別だと割り切れなくなる。

そうした変化を敏感に察知したのがトランプだった。深い分断が生じてしまった以上、分断の向こう側にいる相手を自分たちの側に引き込む努力をしても無駄に終わる可能性が高い。それなら、逆に分断をあおって自らの支持者の結束を固めたほうが効率的だ。

30代　安倍晋三が国会で「野党に敵意むき出し」（2月14日朝日新聞朝刊）のヤジや答弁を繰り返してきたのは、野党をこき下ろすトランプをまねたのではないか。

年金　分断した社会では、厳しい政権批判も、政権に対する国民の異議申し立てとしては扱われず、政権のイデオロギーを支持する側と反対する側の争いとみなされる。逆に政権の担当者が反対する相手を罵っても、公平性を欠いているとは見られず、イデオロギーの異なる勢力どうしの争いとしか受け取られない。

トランプや安倍晋三が、品性がないとなじられようと、全国民の代表者として公平でないと批判されようと、野党を罵ることを繰り返してきのは、それが分断をいっそう煽ることになって「分割統治」がしやすくなるからだ。

野党は政権を批判すればするほど、この統治の仕掛けにはまってしまう危険性があることを知る必要がある。

30代　郷原信郎という弁護士が、新型コロナウイルスによる肺炎に対処するため、「安倍内閣総辞職」「超党派の『大連立内閣』」を提案している（2月14日Ｙａｈｏｏ！ニュース）。

年金　古代社会で災厄に見舞われると王殺しが行われたように、3・11震災は民主党政権を崩壊に導いた。それと同じように、新型コロナウイルスによる感染症が安倍政権の寿命を縮める可能性はある。

3・11原発事故は日本国民を恐怖に陥れた。放射線は雨や風や波と違って目に見えない。拡散の範囲が広く、いつどこでそれを浴びるかわからない。

ニュース日記　728

中村　礼治

分断から統合へ向かうことができるか

前例のない事態を前に多くの国民は原爆を思い浮かべたに違いない。それが恐怖を増幅した。

事故の直接の責任は時の政権にはない。しかし、国民は持って行き場のない怒りや恐怖を政府にぶつけるしかなかった。民主党を政権から引きずり降ろさずにはいられなかった。古代の王殺しが再現された。

新型コロナウイルスは放射線に似たところがある。目に見えない。国境を越えて拡散し、いつどこで感染するかわからない。それに対する恐怖は放射線ほどではないが、日本国内での感染はこれから急拡大する可能性があり、そうなったとき国民の恐れは今より増大するだろう。

30代　そのとき郷原の提案が受け入れられる可能性はあるだろうか。

年金　超党派の大連立は無理でも、超党派の対策チームくらいはつくって知恵や情報を出し合ったほうがいい。問題は政権と野党に分断から統合に向かう度量があるかどうかだ。